



日本音楽教育学会ニュースレター

目次

1 学会からのお知らせ

- 1-1 第47回大会のご案内…………… 2
- 1-2 祝60周年韓国音楽教育学会…………… 3
- 1-3 芸術教育協同シンポジウムの報告…………… 3
- 1-4 2年間を振り返って…………… 4

2 委員会からのお知らせ

- 2-1 編集委員会…………… 4
- 2-2 文献目録委員会…………… 5

3 音楽教育の窓

- 3-1 〈連載〉音楽・教育・学校(7) 荒野に呼ばれる者の声…………… 6

4 会員の声

- 4-1 大学教員としてのスタート…………… 7

5 新刊紹介

- 5-1 『オンチは誰がつくるのか オンチ克服への第一歩』…………… 8

6 報告

- 6-1 平成27年度第4回常任理事会…………… 9
- 6-2 平成27年度第4回編集委員会…………… 12

7 事務局より…………… 13

編集後記

1 学会からのお知らせ

1-1 第47回大会のご案内

大会実行委員長 小川 昌文

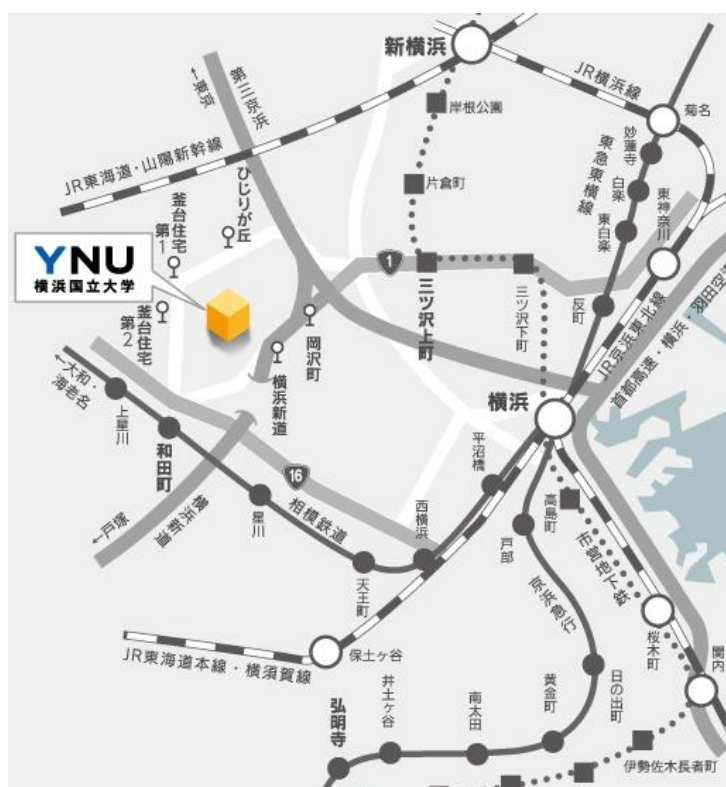
第47回大会は、2016年10月8日(土)、9日(日)の2日間、横浜国立大学常盤台キャンパスにて開催されます。横浜国立大学で本学会が開催されるのは1977年の第8回大会以来実に39年ぶりとなります。すでに実行委員会が立ち上がり、鋭意準備を進めているところです。大会テーマは「ミュージキング：原点からの音楽教育」とし、音楽と音楽教育の原点に立ち返って、今後の学会および音楽教育界のターニングポイントとなるべく設定いたしました。基調講演、シンポジウム、記念演奏会、アウトリーチプログラム等、横浜ならではの多彩なプログラムを用意して皆さんをお迎えしたいと思います。横浜は文明開化の発祥地、進取の気風に満ち、豊かな文化とホスピタリティに溢れた大都市です。ぜひこの秋の3連休をフルに活用して横浜を堪能していただきたく思います。なお、大会ホームページ(<http://www.jmes2016.jp>)は、このニュースレターがお手元に届く頃までにはご覧になれると思います。実行委員一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

実行委員会メンバー

実行委員長 : 小川 昌文
副実行委員長 : 水戸 博道 本多佐保美
事務局長 : 中嶋 俊夫
実行委員 : 有元 典文 一條 昌子
 大田 美郁 大瀧 郁彦
 木村 充子 島田 広
 新原 将義 田崎 教子
 田中 路 田邊 裕子
 中地 雅之 長谷川恭子 森野かおり



上空から見た横浜国立大学



～大会のご案内～

- ◆日時
2016年10月8日(土)・9日(日)
- ◆場所
横浜国立大学常盤台キャンパス
- ◆横浜国立大学 HP
<http://www.ynu.ac.jp/index.html>
- ◆横浜大会公式 HP
<http://www.jmes2016.jp>
- ◆横浜大会実行委員会ブログ
公式 HP よりリンク

1-2 祝60周年韓国音楽教育学会

日本音楽教育学会会長 小川 容子

いよいよ新年度が始まります。年次大会（於横浜国立大学，10月）はもちろん，今年こそ，国際会議へ参加してみようかなと考えている会員の皆様も多いことでしょう。

韓国音楽教育学会の玄（ヒョン）会長から，今年は第60回大会の節目であり，日本からの多くの発表者を歓迎しているとの連絡がありました。大会のコンセプトは“The Methods and Approaches of Music Education”，開催日は8月10日，開催場所はソウルです。

お互いの年次大会を両国会員にとっての有意義な研究交流の場にしたいというのは，一昨年の会談でも話題にのぼりました（ニュースレター第58号）し，昨年の宮崎大会（第46回年次大会）では，玄会長の招待講演，金（キム）副会長，李（イ）会員の口頭発表がありました。今回の「お知らせ」も，こうした流れの一つになります。

まとまった形での成果発表だけでなく，進行中のプロジェクトの紹介，進捗状況報告といった発表も大歓迎です。自身の研究を国際会議で発表することにより，いつもと違うメンバーと出会ったり，建設的な意見交換を通して新しいアイデアが触発されたり，研究の切り口が見つかったり，さまざまな発見があるはずです。韓国音楽教育学会での英語での口頭発表やワークショップなど，是非，ご検討いただければと思います。

発表件数等の調整がありますので，詳細については，国際交流委員会にお尋ねください。学会ホームページでも随時，ご案内いたします。

☞学会ホームページ：<http://日本音楽教育学会.com>

☞問い合わせ先：国際交流委員会 今田匡彦（弘前大学）timada@hirosaki-u.ac.jp

1-3 芸術教育協同シンポジウムの報告

日本音楽教育学会会長 小川 容子

昨年11月29日，学習院大学で「芸術教育協同シンポジウム—教育現場の芸術力を語る—」を開催いたしました。永守基樹先生（美術科教育学会代表理事），大橋功先生（日本美術教育学会事務局長）をお招きし，芸術教科としての音楽と美術の存在意義，両教科が学校教育において果たしている役割，今後の芸術教育が目指すべき道などについて，率直な意見交換をいたしました。お忙しいところ遠路はるばるご参加くださった皆様，貴重なご意見をくださった皆様，有難うございました。特に，日本学校音楽教育実践学会の松本絵美子代表理事，および大学美術教育学会の増田金吾理事長もご参加くださいましたことは，今後の音楽教育や芸術教育における協同・連携をすすめる上で大きな一歩となりました。従来の領域や分野といった枠組みにとらわれることなく，さまざまな切り口から議論をすることで，今，私たちが直面している多くの課題に新しい光を当てることができたと感じております。また，2年間にわたる会長諮問プロジェクトの集大成としても位置づけられると自負しております。同プロジェクトの推進のために，関係者の皆様はもちろん，たくさんの会員の皆様にご協力をいただきました。この場を借りて，改めて御礼申し上げます。本当に有難うございました。

本シンポジウムの詳細な内容については，報告書として作成中です。また，学会ホームページにも詳細を掲載予定です。是非ご覧いただき，忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いです。



当日の様子

1-4 2年間を振り返って

日本音楽教育学会副会長 伊野 義博

副会長退任に際して一言ご挨拶いたします。

任期中の2年間、日本の教育界が大きく変動しようとする中で、本学会がどのような展望と方向性を持ち、どのように行動すべきかがこれまで以上に問われるようになってきたと肌で感じました。学会が社会にどのように貢献し、何を発信すべきかを明らかにし、それらを具体的な行動につなげることが求められてきました。特に学校教育における音楽科の存在価値や位置づけを問い直し、その意義をいかに社会にアピールするかは重要な課題でした。

そうした中で、美術をはじめとした芸術関係学会との連絡・協力体制を図りつつ様々なアクションを起こすことができたのは大きな前進だったと思います。座談会、質問紙調査、鼎談等の実施を通して、芸術教育の課題や意義、音楽教育への期待、他学会の取り組みに学ぶことや連携の重要性が浮かび上がってきました。質問紙調査では、全国30校から協力いただき、2500余名の子どもたちの声をまとめています。そこからは、子どもたちにとって日々の音楽授業がいかに大切なものとなっているかがくっきりと見えてきました。同時に教科音楽への期待と課題も映し出され、さらなる取り組みの必要性を強く感じています。

さて、学会を支えているのは、いうまでもなく会員一人一人の教育研究活動です。それらは毎年の大会、地区例会、ゼミナール、学会誌等により推進されていきます。中でも学会誌は、会員の研究を推進し、学会活動を知る上で重要な存在です。まさに学会の顔と言えるでしょう。このたび『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』がこれまでの実績を踏まえつつ新たな顔として再出発することになりました。このことも副会長在任中の大きな出来事です。会員からの声をもとに、学会誌のあり方に関する検討委員会ならびにWG、理事会、編集委員会等、関係諸氏の英知を集約し、リニューアルの運びとなりました。新しくなった両学会誌の願いは「きらりと光る貴重な投稿を掲載」することにあります。会員の積極的な投稿を期待しています。

以上のことは、小川会長が2年前就任時に示された以下の指針のもとに実施されました。

1. 研究によって生み出される音楽芸術の知の正当性を、科学的に示す。
2. 教育・研究に関する学際的な交流を推進し、その成果を社会に還元する。

アクティブな小川会長とスマートで素早く仕事をされる本多事務局長の間で、実際のところついて行くのに精一杯でしたが、何とかここまでたどり着くことができました。

直接関係した皆様はもとより、何よりも活動を支えて下さった会員の皆様に感謝し、退任の挨拶といたします。

2 委員会からのお知らせ

2-1 編集委員会—今期の活動を振り返って—

編集委員会委員長 永岡 都

今期（2014—2015年度）の編集委員会からのお知らせは、この記事をもって最後となります。改めて2年間の活動を振り返ってみたいと思います。

まず、学会誌については、『音楽教育学』4冊、『音楽教育実践ジャーナル』4冊、計8冊を発行しました。昨今の音楽教育をめぐる動向を反映して、「幼児と音楽」「音楽科へのエール」（以上

『音楽教育学』,「音楽教育におけるリズム活動を再考する」「授業をクリエイトする」「これまでに音楽科が果たしてきた役割,これからの音楽科が担うべき役割」「学習者の視点から音楽教育を考える」(以上『音楽教育実践ジャーナル』)など,さまざまな特集テーマに取り組んできました。なかでも「音楽科へのエール」特集で,学会の枠を超えた他分野の先生方からご寄稿いただいたこと,『音楽教育実践ジャーナル』の特集として「音楽科の授業」を集中的かつ継続的に取り上げたことは,意義深いことであったと思います。

また,今期は,「学会誌の質を落とすことなく掲載率を高める」「2つの学会誌の性格の違いを明確にして投稿を活性化する」「編集委員の負担軽減」という前期編集委員会から引き継いだ課題に取り組み,常任理事会と連携しながら学会誌編集の抜本的見直しを図ったのも,大きな仕事でした。会長の諮問機関として設置された「音楽教育実践ジャーナル検討委員会」「学会誌のあり方に関する検討委員会」の答申を受けて,そこに示された新しい学会誌の編集方針をどのように具体化できるのか,編集委員会も悩み,模索を続けました。最終的に,『音楽教育実践ジャーナル』を年1回発行の実践交流誌とすること,査読付き論文を『音楽教育学』に集約すること,それに伴って学会誌の発行回数と発行時期を変更するなど,約10年ぶりの大規模なリニューアルとなりました。(詳細は,ニュースレター第62号をご覧ください。)

通常の編集業務と並行して,新しい編集体制を実務レベルで軌道に乗せる仕事は予想以上に困難でしたが,編集委員一同,一丸となって真摯に向き合いました。そして,2月に開かれた今期最後の編集委員会で新しい『音楽教育学』の表紙を選定しながら,ようやく次期編集委員会にバトンタッチできるところまでたどり着いたと,ほっと胸をなでおろすことができました。

さて,学会員の皆様に新しい学会誌が届くのは,『音楽教育学』第46巻第1号が8月,『音楽教育実践ジャーナル』vol.14(通巻第27号)の方はさらに4ヶ月後の12月になります。少し期間が空きますが,どうかご期待いただきたいと存じます。と同時に,これからも両学会誌への積極的な投稿をお願いいたします。最後となりましたが,お世話になりました関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに,新しい学会誌と学会のますますの発展を祈念して,締め括りのご挨拶とさせていただきます。

2-2 音楽文献目録委員会

音楽文献目録委員 木間 英子

第166回音楽文献目録委員会は,2015年12月19日に東京音楽大学図書館で開催された。

- ・音楽文献目録43号を2015年10月1日付で発行したこと,
登録文献数:1,324(昨年1,220),印刷部数:400部(昨年同)
- ・定期購読者と広告件数の減少などによる委員会の財政難により,43号からレイアウトを変更してページ数を減らす等の対応策を講じたこと,
- ・Web検索プロジェクトについては,試験公開に向けて,現在サイトの内容チェックと動作環境確認中であること,

その他の報告が事務局よりあった。

また,文献目録の選定方法,文献資料の収集方法の再検討,索引の抽出方法と基準の再確認,分類の基準や内容の再確認,国際版への送付基準の再検討の5件が継続審議となった。

3 音楽教育の窓

3-1 〈連載〉音楽・教育・学校（7） 荒野に呼ばれる者の声とする

奥 忍（関西外国語大学）

「エッ！音楽の勉強にオーストリアじゃなくてオーストラリアに？」という問いを何度投げかけられたことか。ビートルズ来日から数年、「バイミュージカルティ」が日本の音楽教育のファッションであった。1980年代前半にはバイリンガル教育が日本の学校教育の先端的ファッションであった。カナダはこの問題で成果を上げているといわれていた。では、オーストラリアは先住民族に対する教育問題にどう向き合っているのか。私は南半球に飛んだ。1985年のことである。

白豪主義の下で阻害されてきたアボリジニに対して同化政策が進んだのは1960年代以降である。1980年代は政策の、いわば試行期であった。彼らは特定の地域で居住しており、日常ではイベントなどで時たま見かける程度である。「どうしてあんな人たちに興味があるの？」これは周りのオーストラリア人から投げかけられた問いである。多数派オーストラリア人がアボリジニの文化的価値を見いだすためにはオーストラリア建国200年（1988年）を待たなければならなかったのである。

オーストラリアの学校でアボリジニの子どもたちを見かけることはなかった。人口の多い西オーストラリア州やクィーンズランド州の公立学校でさえ、彼らの姿は見られなかった。私はオーストラリアでのバイリンガル・バイカルチュラル・バイミュージカルの研究は断念し、彼らの様子を「切り離された文化」として観察することにした。

キャンベラのアボリジニ研究所で古いフィルムを見ていた時のことである。それはクィーンズランドの北端、ヨーク半島のアボリジニの祭の記録であった。各地から参集したアボリジニが一週間にわたって次々と生き生きと歌い、踊っていた。ところが日曜日に様子が一変する。広場の円陣の一角には司祭が立ち、みんなで賛美歌を歌うシーンである。音程は上がり、声の勢いは落ち、視線は落ち、肩さえ落ちてるように見える。その様子に私の胸は締め付けられた。そしてこの瞬間何かが私を貫いた。

隆起のないリズム感、平べったい発声、もごもごと口ごもるような発音を嫌ってきた私の家庭環境。友だちと一緒に日本舞踊を習いたいという私の願いは「あんなものはあなたの習うものではない」の一言で片付けられた。音楽をするにはキリスト教の素養が必要だからと学校を選択し、いつの間にか（西洋）音楽への一本道を歩んでいた。学校の音楽の先生方の中には同じような環境の中で育った方が少なくないのではなからうか。

オーストラリアから帰国して、私は日本人の音楽的感性の変容の実験研究に着手した。賛美歌を歌うアボリジニの姿に「ヨーロッパで勉強してこなければ本物の音楽家ではない」という、私の周りの音楽家・音楽愛好家・音楽教師を重ね合わせたのである。自分を惹きつける音楽は一体どのような特質を持っているのか、それは何時どこから来てどのように変わってきたのか。本当に奏でたい音楽を私はどのように表現しようとするのか。子どもたちには一体何を伝え、何を子どもたちの中から引き出し、育てていこうとするのか。

「以前にはヴァイオリンを弾いていた人がこんな研究をしているのはなぜ？」と聞かれたことがある。オーストラリアの荒野で生活している人々の声が私を呼んだのだ。あのフィルムを見たときからこれまで長い年月を経た。そして今、私は能楽師の人たちと一緒に「学校で子どもたちが能を学習し、その子どもたちを指導できる教員を育成」する研究をしている。

4 会員の声

4-1 大学教員としてのスタート

西田 治（長崎大学）

長崎大学に着任して9年目となる。着任した頃は、やっと得られた常勤のポジションが嬉しく、「これでやりたいことが始められる」とスタートラインに立つ思いだった。そのやりたいこと（＝ライフワーク）とは、「音楽と人との関わりをサポートすること」であったため、小中学校への出前授業や吹奏楽部のレッスン、保育園での音あそび、地域イベントでの即興演奏のワークショップに多くの時間を費やした。今、思い返すと大学外での活動が多く、肝心の大学生への関わりが希薄であった。

そんな私に転機が訪れたのは、3年前、大学の教養教育を担当する機会を得たことからだった。それまでは、教育学部で教育方法に関わる講義をメインとしてきたが、教養教育では医学部、工学部などの学生たちを対象に、教養としての音楽を教えることになったのだ。教育学部の講義では、担当するどの科目も「将来、教員になるための力をつける」という明確な方向目標があるため、講義方法や内容に迷うことはあっても、向かうべき方向性に迷うことはなかった。

しかし、教養教育となるとすべてが手探りだった。講義の構想を考える際、糸口となったのは、教育学部の小学校教育コースで講義をしているときに感じていた、「学生の音楽に対する苦手意識」であった。多くの学生は、「音楽は好きだけど、苦手だ」という。それは、楽譜が読めないことやピアノが弾けないことからくるものようであった。将来、小学校の教員となる学生たちには、「今からでも遅くないから楽譜を読めるように勉強し、ピアノも少しずつ練習したほうが良い」と伝えてきた。それは、学校で音楽の授業を行うのに必要な力であるからだ。

一方、教養教育を受講する学生たちには、他の方法でその苦手意識にアプローチしたいと考え構想したのが、グループ即興演奏の体験を中心に据えた講義展開である。この講義で私が意図したことは、楽譜がなくてもピアノが弾けなくても誰かと共に音楽することができる、という体験的な理解に基づく音楽観の再構築であった（本講義の概要については今年度の学会大会で発表させていただいた）。

以上のような経緯で教養教育に携わり始めてから、大学教育そのものへの関心が高まり、3年前から大学教育学会や大学教育研究フォーラムに参加するに至った。専門分野は異なるが、「大学教育をどうしていくか」という共通の関心を持った先達や仲間と出会えたことは、大きな糧となっている。また、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（スーパーバイザー：東京大学・栗田佳代子氏）への参加は、自らの教育経験を深く振り返る経験となり、大学教員としての今後の在り方を考える契機となった。

専門教育、教養教育、それぞれでいかに大学生と関わり、何をどのように伝えていくか。「学ぶこと」と「学びほぐすこと」をいかに往還するか。これまでとは異なる在り方や関わり方が見えつつある今、また新たなスタートラインに立たせてもらった思いである。

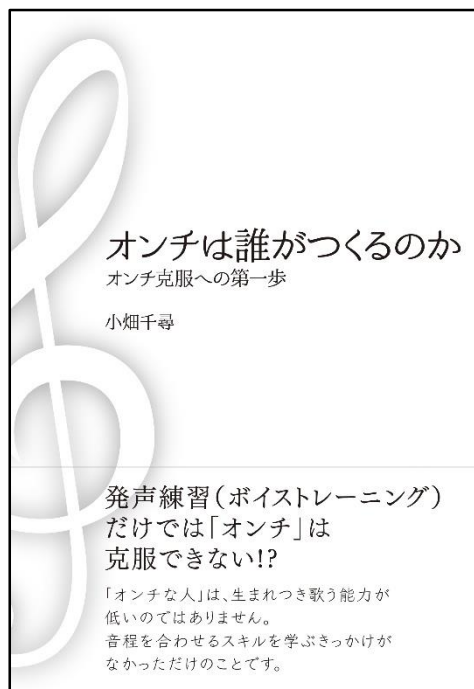


グループ即興演奏の様子：筆者の篠笛と共に

5 新刊紹介

5-1 『オンチは誰がつくるのか オンチ克服への第一歩』

小畑 千尋（宮城教育大学）



オンチ（「音痴」）はいわば単なる俗語であり、「音痴」である、ないということそのものに明確な線引きができるわけではありません。それにもかかわらず、一般的に歌唱における「音痴」に関しての最大の関心事は、「音痴」は「なおる」のか、それとも「なおらない」のかという問題です。

しかし、「音痴」という俗語をもう少し別の表現で捉え直して、「音程を正しく歌えないこと」と理解すれば、音程を正しく歌うことについては、その能力が発達するためのしかるべき練習方法は確かにあります。しかも音程を正しく歌うことは、成人になってからでも十分に向上する能力なのです。

「音痴」の問題は決して他人事ではありません。オンチ意識を持っている人は、実際はかなり多いのです。大学生では合計46%、社会人では37%が、自分自身を「非常に」もしくは「少々」「音痴」だと意識しているという結果もあります。「音痴」を考える際に何よりも留意しなければならない側面は、自分自身が「音痴」であるという劣等意識、すなわち音痴コンプレックスであり、この

ことが歌を歌う際の大きな阻害要因となっていることです。

そして、「音痴」だと意識させられる場として考えられるのが、学校の音楽の授業です。音痴コンプレックスのある方の中には、音楽の授業で、歌を歌って否定された経験を鮮明に覚えている方が実に多いのです。それと並んで挙げられるのがカラオケです。カラオケ文化によって、歌うことが好きな人たちにとっての最高の娯楽ができた一方で、人前で歌うことを余儀無くされる場が増え、「音痴」をさらに浮き上がらせるきっかけとなったのです。

「音痴」克服のキーワードは「内的フィードバック」、つまり、「自分で歌いながら音程が合っているかどうか認知できる能力」です。たとえ他人が聞いて音程がほぼ問題ないと思う歌声であっても、本人の音痴コンプレックスが強く、その上、内的フィードバック能力が上手く機能しないのであれば、合っているかどうかの基準がないので、不安は解消されません。

本書のレッスンでの様子を通して、音痴コンプレックスを持つ方々が、どのように内的フィードバック能力を獲得していったのか、そして、「音痴」を克服し、歌との関わり方がどのように変化したのかがおわかりいただけると思います。さらに、実際に試していただけるように、具体的なトレーニング方法についても載せさせていただきました。

音痴コンプレックスを持っている方、カラオケに行くのがつらい方、音楽の授業で心無い言葉を言われた方、ご自分のお子さんが「音痴」ではないかと思っている方、そして歌唱指導を行う学校の先生、合唱指導をなさっている先生、ピアノなどを教えていらっしゃる音楽教室の先生に、音程が合っているかどうかわからない方でも、歌唱技能が向上し、「音痴」は克服できることを、本書を通して知っていただけたら幸いです。

小畑千尋著 パブラボ出版 2015年7月4日発行
全280頁、本体1,500円+税
ISBN978-4-434-20635-1

6 報告

6-1 平成 27 年度第 4 回常任理事会

日 時：2016 年 2 月 21 日（日）15:00～17:00

場 所：立教大学 12 号館第 4 会議室

出席者：小川，伊野，本多，加藤，権藤，佐野（記録），嶋田，杉江，水戸，三村

小川会長の挨拶に続き，本多事務局長より平成 27 年 10 月 3 日以降の会務報告がなされた。

【会務報告】〈平成 27 年 10 月 3 日以降〉

平成 27 年 10 月 3，4 日	日本音楽教育学会第 46 回大会（宮崎大会）
10 月 3 日	平成 27 年度総会（宮崎シーガイア・コンベンションセンター）
11 月 29 日	芸術教育協同シンポジウム（学習院大学）
12 月 24 日	『音楽教育学』第 45 巻第 2 号，ニューズレター第 62 号発送
平成 28 年 2 月 21 日	平成 27 年度第 4 回編集委員会（立教大学）
2 月 21 日	平成 27 年度第 4 回常任理事会（立教大学）

【会計報告】以下の項目に従って，会計報告が行われた。

1. 第 46 回大会（宮崎大会）会計報告（阪本→本多）▶11 頁参照

2. 白金ゼミナール会計報告（佐野）▶12 頁参照

3. 平成 27 年度会計中間報告（杉江）

12 月までの時点で，予算案に従って順調に執行されているとの報告があった。平成 27 年度の決算は，来年度第 1 回理事会で報告の予定。

【審議事項】

1. 第 47 回大会について

(1) スケジュール及び内容等について

- ・小川昌文大会実行委員長と中嶋俊夫大会事務局長が出席してスケジュール・内容等の提案を行い，協議を行った。第 47 回大会の目玉の一つが，横浜市と協賛で実施する「アウトリーチプログラム」であり，具体的な内容や手続きについては実行委員会に一任となった。
- ・スケジュールに関しては，大会 2 日目の 17 時 20 分を終了時刻とすることが承認された。
- ・共同企画に関しては，大会 2 日目の午後に加え，研究発表と同時進行でも枠を設定したいという提案があり，これを承認した。

(2) プロジェクト研究について（加藤・嶋田）

- ・来年度 2 年次を迎えるプロジェクト研究については，継続性を考慮し，来年度も現担当者が引き続き企画を担当することになった。これまでの『音楽教育実践ジャーナル』の総括，検証を行うために，社会と結んだ調査研究を実施する方向が承認された。

(3) 大会実行委員会との覚え書き，応募要領，発表チェックリスト，申込み専用 Web ページの件（本多）

- ・「大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き」，「研究発表応募要領」，ならびに「研究発表にあたってのお願い」及び「発表者用チェックリスト」の内容について確認を行い，承認した。
- ・「大会参加申込・発表申込登録システム」に関して，従来の JTB のシステムに代わって，新たに東武トップツアーズによるシステムを採用したいという提案があり，これを承認した。

2. 共同企画について

従来の共同企画申込書のフォーマットを確認し，承認された。

3. 学会誌電子化の範囲について

J-STAGE に学会誌のどの部分を掲載するかについて協議を行った。1 件あたりの経費など見積もりの詳細を次回常任理事会で提示し、あらためて協議することとなった。

4. 第 48 回大会について (小川)

第 48 回大会の開催地が愛知教育大学に決定したことが報告され、これを承認した。

5. 平成 28 年度ゼミナールについて

内容の詳細は、次回常任理事会において企画担当理事より提案される予定。

6. 2016 年 8 月の KMES (韓国音楽教育学会) について (小川)

小川会長から、KMES から 8 月の大会への招聘があった旨が報告された。協議の結果、以下の 2 点が承認された。

- ① 会長提案で講演もしくはワークショップ等を実施する。具体的な内容については、次回常任理事会で小川会長が提案する。
- ② 研究交流と会員交流を促進するために、3 月のニュースレターで KMES での発表 (英語もしくはハングル) を募集する。

7. 学会 50 周年にむけて (小川)

平成 31 年度の学会 50 周年に向けて、検討ワーキングを立ち上げることが提案され、これを承認した。

8. 新入会員及び退会者について (本多)

新入会員及び退会者の報告がなされ、これを承認した。また、1 名の再入会が認められた。

◇正会員 新入会員 (2015 年 10 月 2 日理事会以降) : 15 名

2016 年 2 月 17 日現在 正会員総数 1,552 名 学生会員数 1 名

9. その他

学会の法人化に向けて議論をさらに深めておく必要があるのではないかと提案があり、継続審議とすることが承認された。

【報告事項】

1. 会長諮問プロジェクト (小川・水戸・本多) ▶3 頁参照

報告書の完成及びホームページへの掲載が間近であることが報告された。

2. 各委員会報告

(1) 編集委員会 (三村) ▶4 頁, 13 頁参照

学会誌編集の進捗状況とともに、『音楽教育実践ジャーナル』vol.13 no.2 発行 (3 月末日予定) と同時期にアンケート結果がホームページに掲載されることが報告された。

(2) 広報委員会 (権藤)

3 月発行のニュースレターは入稿が 3 月初旬であり、締切を厳守してほしいとの依頼があった。

(3) 音楽文献目録委員会 (木間→本多) ▶5 頁参照

第 166 回音楽文献目録委員会の議事録が資料として提示され、その内容を確認した。

*今後の予定 : 2016 年 4 月 17 日 (日) 常任理事会 (13:00~14:30), 理事会 (14:30~16:30)
於 聖心女子大学

第 46 回大会決算書

【収入の部】

費 目	金額 (円)	備 考
口座開設時入金	1,000	
大会本部経費	700,000	
公益財団法人みやざき観光 コンベンション協会	1,800,000	補助金として
出展料	120,000	20,000 円×6 社
広告料	460,000	20,000 円(B6)×9 社 40,000 円(B5)×7 社
臨時会員参加費 (両日)	140,000	5,000 円×28 名
臨時会員参加費 (1 日)	60,000	3,000 円×20 名
臨時会員参加費 (学部学生)	4,000	2,000 円×2 名
懇親会参加費	1,086,000	6,000 円×181 名 (JTB 事前 109 名, 当日 72 名)
雑収入	38	銀行利息
収入合計	4,371,038	

【支出の部】

費 目	金額 (円)	備 考
口座開設時入金分の返金	1,000	
会場使用料	1,496,792	ピアノ借用及び調律代含む
大会用物品借用費等	856,211	分科会機器, パネル, 看板作成および搬入搬出, HP 作成, 名札デザイン, 交通手配等
大会実行委員交通費	141,102	実行委員会 2 回開催分, 事前準備に伴う交通費
会議費	12,000	実行委員会, シンポジウム事前打ち合わせ
シンポジスト謝金	80,000	
シンポジスト交通費	132,666	
大会消耗品費	45,846	事前準備, 当日用文具, コピー等 基調講演者, スタッフ休憩室茶菓代含む
アルバイト謝金	217,600	会場および空港案内ブース
懇親会費	968,837	
弁当代	30,985	
郵送費	10,550	
雑費	1,620	振込手数料
学会本部への返金	375,829	
支出合計	4,371,038	

上記の通り, 日本音楽教育学会第 46 回大会決算書を提出致します。

2016 年 2 月 10 日

第 46 回大会事務局長兼会計担当

阪本 幹子

白金ゼミナール決算書

【収入の部】

項目	金額	備考
参加費	178,000	¥3,000×42名(一般)・¥2,500×20名(大学院生)・¥2,000×1名(学部生)
平成27年度ゼミナール補助金	300,000	
利息	1	
合計	478,001	

【支出の部】

項目	金額	備考
講師謝礼	60,000	
HP制作・保守・管理	50,000	
授業記録作成作業代	64,000	¥800×12.5時間×3名・¥800×42.5時間×1名
配布資料作成作業代	16,000	¥800×20時間×1名
映像作成作業代	8,000	¥800×5時間×2名
配布資料印刷代	66,524	
当日会場アルバイト代	32,000	¥800×8時間×2名(1日目)・¥800×4時間×2名(1日目)・¥800×8時間×2名(2日目)
テープ起こしアルバイト代	42,000	¥800×25時間×1名・¥800×12.5時間×1名 ¥800×7.5時間×1名・¥800×5時間×1名 ¥800×2.5時間×1名
弁当代	28,905	
雑費	11,540	文具代, 郵送費, 振込手数料等
学会本部に返金	99,032	
合計	478,001	

第13回音楽教育ゼミナール決算を上記のとおりご報告致します。

2016年1月19日 第13回音楽教育ゼミナール実行委員会会計担当 市川 恵

6-2 平成27年度第4回編集委員会

2月21日(日), 立教大学にて平成27年度第4回編集委員会が開催された。主な報告, 協議事項は以下の通りである。

- (1) 『音楽教育実践ジャーナル』 vol.13 no.2の編集進捗状況報告。
- (2) 『音楽教育学』第46巻第1号(2016年8月刊行予定)の編集企画など, 次年度に引き継ぐ編集作業について協議。
- (3) 投稿原稿の採否について: 『音楽教育学』への投稿は, 研究論文5本, 書評論文1本で, 審議の結果, 研究論文1本が「採択」, 研究論文2本が「再査読」, 研究論文2本と書評論文1本が「不採択」となった。また, 『音楽教育実践ジャーナル』への自由投稿は, 論文3本, 報告1本で, 審議の結果, 「論文」1本が「採択」, 論文2本と報告1本が「不採択」となった。

7 事務局より

事務局長 本多 佐保美

〈2年間をふりかえって〉

事務局長としての2年間が終わろうとしています。今川前事務局長のもと進められてきた事務局運営の安定化と効率化の成果を引き継ぎ、安定した中継ぎの2年間になるだろうと予想しておりましたが、着任早々から文科省に足を運んだり、学会誌検討委員会が新たに立ち上がったりと、怒涛の2年間となりました。

「会長諮問プロジェクト」においては、全国30校、2,500人の子どもたちにたいする調査や、本年度6月と11月に、座談会とシンポジウムの開催と、それらをまとめた報告書の作成をとおして、エビデンスにもとづく教科音楽の重要性について一定の成果を示すことができたと思います。「両学会誌のあり方に関する検討委員会」での熱い議論は、規約改正と来年度からの両学会誌のリニューアルに結実しました。また、4年ぶりの会員名簿作成も行うことができました。

これらはすべて、会員の皆様と執行部および理事の皆様のご理解ご協力の賜物です。そして何より事務局スタッフの献身的な働きのおかげです。本当にありがとうございました。ここに記して感謝申し上げます。

〈事務局より〉

1. 第47回大会に関するお知らせ

第47回大会は、10月8日(土)・9日(日)に横浜国立大学にて開催予定です。多数のご参加をお待ちしております。研究発表をご希望の方は、同封の応募要領をよく読んでお申し込みください。なお、研究発表に関する情報は、随時学会ホームページ上でお知らせしていきます。

2. 会費納入のお知らせ

年度会費の納入をお願い致します。納入期限は5月31日です。期限内に会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお、2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。

3. バックナンバーの販売について

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売も行っております。詳しくはホームページをご覧ください。

◆事務局開局時間

月・水・木 9:00～15:00

開局曜日が、金曜日から木曜日に変更になっています。

E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) FAX : 042-381-3562

◆事務局員

亀山さやか・若尾裕子

～スタッフより～

お陰様で第21期も無事に終りを迎えようとしています。2名のスタッフで至らぬ点も多いかと存じますが、第22期も気持ちを引き締めて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。(亀山・若尾)



国内外の研究会等への参加記，ご意見，新刊紹介等，引き続き
ご投稿をお待ちしています。

投稿先アドレス

onkyouiku.kouhou@gmail.com



..... 【編集後記】

日本音楽教育学会の確かな記録の蓄積となるように，また，会員相互の研究協議のサポートとなることをめざして，皆様のご協力を得ながら8冊のニューズレター編集作業に携わってきました。「会員の声」「新刊紹介」への随時のご投稿，各地区からのご執筆，国内外の情報を届ける「音楽教育の窓」へのご執筆，本当にありがとうございました。

近代学校制度の成立から約140年，戦後の新教育から70年という節目をとらえ，昨年度より「〈特集〉音楽・教育・学校」の連載をスタートしました。学会が「教科音楽の重要性」の発信に取り組み，社会との連携を深める働きかけをするなかで，小さなニューズレターにできることを委員で相談して考えた企画ですが，広報委員会から大熊信彦氏，丸山忠璋氏，山本文茂氏，遠山文吉氏，柳生力氏へとバトンをつなぎ，ニューズレターならではの語り口でお話をうかがうことができました。ご体調の悪いなか，それでも会員に伝えたいことをお書きくださったときもあり，この場を借りて改めて心より感謝申し上げます。今号は，奥忍氏にご執筆いただき，「学校で子どもたちが能を学習し，その子どもたちを指導できる教員を育成」する現在のご研究の根っこにあるものを語っていただきました。どの回も，貴重なご経験と知見を開示してくださるものであり，この先，音楽科教育80年にどのように向かっていくのか，音楽科教育をどう変えていけばいいのか，会員一人ひとりに響くものがあつたように感じています。

4月からは，新しい広報委員会が立ち上がります。一層充実したニューズレターをご期待ください。学会ホームページ上での報告等も増えていくなか，皆様からのご投稿で紙媒体ならではの交流が広がることを願っています。

強力なチームワークのもと，齊藤忠彦副委員長，長井覚子委員，村上康子委員とともに2年間楽しく広報の仕事をしていただきました。どうもありがとうございました。

(権藤敦子)

..... 【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・木

開局時間：9：00～15：00